



# 六条円卓会議 News Letter

浄土真宗本願寺派総合研究所

## 第1回 六条円卓会議



### 公共性の理解から実践へ

- 1 公共性の理解から実践へ
- 2 小林正弥氏からの発題
- 3 柴内康文氏からのコメント
- 4 本願寺白熱対談
- 5 宗門における課題
- 6 本願寺白熱教室
- 7 本願寺白熱教室で出た意見

「被災地で、僧侶は袈裟を身につけて活動すべきか、否か」  
ジレンマとは、この問いのように、態度を容易に決めかねるような二つの選択肢が示され、板挟みになっている状態のことである。



二〇一三年九月十二日、六条円卓会議とその成果を広く公開するために第一回公開講座が開催された。

六条円卓会議とは、内外の有識者の知見を得つつ「宗制」に掲げられ

ている「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」に、宗門がどのように貢献できるか具体的に模索するために設立された場である。六条円卓会議の「六条」とは、本願寺の所在地の名称であり、「円卓」とは卓を囲み、額をつきあわせながら議論をすることを表す言葉である。すなわち、「六条円卓会議」とは、宗門、そして現代社会の課題について、六条の地に集い、議論を繰り広げ、その知見をもつて、宗門と社会の未来を切り開くことを目的として開催されるものである。

第一部の公開講座では、小林正弥・千葉



熱気を帯びた会場

「人間はどう生きるべきか」「世界はどうあるべきか」  
公共性の形成には宗教が大きな役割を果たす。

「自他共に心豊かに生きることのできる社会」とは、  
まさに公共的発想である。

大学大学院教授が約二〇〇名の参加者と共に「宗教と公共性」をテーマとした活発な議論を行った。小林氏が発題し、社会関係資本の専門家である柴内康文・東京経済大学教授からコメントがなされ、それに引き続き、参加者が意見を表明しあう対話型の議論が展開された。

また、第二部の六条円卓会議では、小林氏によって示されたモラル・ジレンマをめぐって、招待された参加者五〇名による白熱した議論が繰り広げられた。

「公共性」においては、異なる意見や価値観を持つ者が寄り集まり、誰もが排除されることなく、対話や熟議を積み重ね、関係するすべての人にとっての「共通善」を形成しようとして試みることが重視されるが、この日、第一部、第二部を通じて、実に五時間にも及ぶ、白熱した議論がたたかわされた。

本稿は、その記録である。

## 六

### 小林正弥氏からの発題



#### 小林正弥

(こばやし まさや)

千葉大学大学院教授。

1963年生。東京大学法学部卒。専門は政治哲学、公共哲学、比較政治。マイケル・サンデル教授と交流が深く、NHKで放映された「ハーバード白熱教室」では解説も務めた。

ズムは、美德を重視して共通善の形成を目指し、積極的な民主的市民としての公民的美徳を涵養する重要性をしばしば主張するという。

また、コミュニ

#### 公共性とは何か？

小林氏は、「ハーバード白熱教室」で有名なマイケル・サンデル氏などと同様に「コミュニティアニズム」という思想的立場に立つ研究者である。そのため発題では、まずコミュニティアニズムの考え方について紹介された。まず、コミュニティアニ

ニタリアニズムは、社会における宗教の役割を重要視する特徴を持つ。たとえば、現在の政治において大きな勢力を持つリベラリズムの場合、公私二元論の立場をとり、宗教を私的領域に押し込める傾向がある。それに対して、コミュニティアニズムは「人間はどう生きるべきか」「世界はどうあるべきか」といった共通善の形成において、宗教が大きな役割を果たすと考えるので、政治や公共の場においても宗教が必要であると強く主張するのである。



続いて小林氏は「公共」という語について解説した。それによれば、公おおやけという言葉はいわゆる「おかみ」

のイメージが強いが、公共とは人々全体のことを意味するという。また、似た言葉である「共同性」という語は、異質な他者を排除しようとする性質を含む場合があるのに対して、「公共性」は、そのような他者の多様性を認め、共通性を実現しようとする概念であるという。ただ、多様性を認めてしまうと、当然、共通善に対して多様な考えがあり、共通善を想定することが非常に困難となる。よって、そこに「白熱教室」のような対話の重要性が存在すると力説された。

## 宗教と公共性

さらに小林氏は、今回のテーマである「宗教と公共」について言及された。聖徳太子や道元どうげんぜんじ禅師、浄土真宗じゆんしゆが加賀かがにおいて宗教的自治まで

達成した歴史を持つことを例に挙げ、日本の仏教が、善き生や正しさを目指していた歴史を持ち、かつて仏教が強い公共性を発揮した時期があったと論じた。

最後に、宗門の「御同朋おんどうぼうの社会をめぐす運動」が、まさしく公共的発想であると、小林氏は位置づけた。宗門内外の多様な人々とながらうとする運動である点、内部のためにとどまらない、「共同性」を超えた運動である点を重要とし、この姿勢から、現代社会のさまざまな問題についても、浄土真宗が積極的に発言、実践していくことに期待したいと述べ、発題が締めくくられた。

## 柴内康文氏からのコメント

コメンテーターである柴内康文氏からは、小林氏の発題を受けて、三つの課題が提起された。

第一に、共通善をいかにして構想しうるのか、という課題。個人や集団が奉じる宗教間の垣根を越えて、公共性の核となりうる普遍的な価値観はいかにして可能であるのか。

第二に、宗教に関心のある人が、いかに公共的な問題へと関心を持つことができるようになるのか、という課題。宗教に関心のある人は、そも



柴内康文  
(しばない やすふみ)

東京経済大学教授。  
1970年生。東京大学文学部卒。専門は社会心理学、メディア・コミュニケーション論。

そも内面的なことに興味を持って、いる半面、社会的・政治的なことに対する関心は比較的希薄きはくなものではないか。そのような人々が、いかに公共に関する問題へと関わる動機を持つことができるのであろうか、という問いかけであった。

最後に、宗教と社会、あるいは政治との関係の難しさが指摘された。今日のアメリカにおいて見られるように、政治的保守とキリスト教右派が結びつくことによって、保守的思考を嫌う人々の宗教離れが加速し、その結果、キリスト教右派以外の宗教集団も政治から距離を取り始めるようになってしまった。このように、宗教が政治に関わろうとすること、むしろ宗教離れが加速するとう問題について、指摘がなされた。

## 六

### 本願寺白熱対談（第一部）



第一部の討議・質疑応答は、フロア

アの参加者も加わった。「対話型講義」形式で進められた。この「対話型講義」は、小林氏がこれまで提案してきたスタイルで、互いが対等な立場で議論しながら、自身の考えを深めていくというスタイルである。

「宗教と公共性」というテーマについて、有意義な熟議が進められたが、誌面の都合上、詳細な紹介はできない。議論の一部を報告する。

まず小林氏から、「なぜ仏教者は社会的な活動を行うのか」という問いが投げかけられた。会場からは「被災地では、活動する中で自己へ

の宗教的な問いかけが生まれるので

あり、信仰が先、活動が後ということではない」という意見や「信仰がきちんとしているからこそ公共性たりの意見が出された。また「自他共に」の「他」が教団内に限定された他者であれば「本当の公共性」ではないという意見も聞かれた。こうした意見に対し、宗教が公共的であるためには心の問題を掘り下げ、その立場から公共に関与していくことが重要であると小林氏は指摘した。

異質な価値の間で対話がなされ、社会全体で認められる普遍的な価値

「自他共に心豊かに……」という文言にある「他」をどこまで想定しているか？ 教団内限定の「他」では「本当の公共性」ではない。

観を見いだしていくには、対話を継続していく必要がある。多様な人々が参加した対話の第一歩を踏み出したことに、このたびの公開講座の意義があると言えよう。

# 六

## 宗門における課題（第二部）「互酬性を育むつながり」

第二部では、まず、「白熱教室」での議論を進めていく前提として、宗門や寺院の抱える課題についての調査報告が、二人の研究者からなされた。

まず、長岡岳澄氏（中央仏教学院講師）から、「宗勢基本調査」の結果から見えてきた現状や課題についての報告がなされた。以下、二点について紹介する。一点目は、真宗寺院の多くは小規模であり、葬儀や法事などの法務以外の活動をする余力がないという報告であった。多くの住職は、ボランティア活動などの社会的貢献や現代社会の課題について関心があるけれども、現実には、時間的・経済的な余裕がないため、積極的に関与できないでいる。また、意識調査から見えてきたものとして、住職と坊守とでは、憲法や死刑といった現代的課題について考え方が近いが、門徒との間には違いが見られるという報告がなされた。寺院

という空間には、現代的な諸問題について異なった価値観の人々が集まっており、多様な意見がある現代的課題については、僧侶と門徒との間で、積極的な対話がなされていないことが明らかにされた。

猪瀬優理氏（龍谷大学社会学部講師）からは「地域における寺院の機能と展望」という題目で報告がなされた。寺院が地域にこれまで果たしてきた役割、機能はさまざまであるが、現代においても、多くの寺院が地域コミュニティの中心にあつて、人々の「つながり」を結ぶ役割を果たしているという報告であった。そ

の中で、興味深かった点は、寺院から恩恵を受けたという気持ちだが、地域のために何らかのかたちで「返す」という行動につながっているということである。

ここに社会関係資本理論の「互酬性」があらわれていると見ることもができる。報酬を直接に期待しない行為が寺院において育まれ、それが地域社会の「つながり」という財産になつているのである。

この二つの研究報告をもとに、小林氏は、十一のジレンマを設定した。いよいよ白熱教室の始まりである。





## 六

### 本願寺白熱教室



公共社会において、  
宗教者はどのように  
行動すべきか？

第二部では、六条円卓会議招待者による「本願寺白熱教室」が行われた。これは小林氏が、マイケル・サンデル氏に触発されて日本でも展開している「対話型講義」のことである。この「対話型講義」のルーツは、ソクラテスの対話型哲学探究にある。この方法では、誰かが人の上に立って、答えを与え教えるわけではない。問いに対する対話を相互で行い、議論を深めていく中で、思索を促していくことから、「産婆術」とも呼ばれている。こうした対話を進めていくためには、まず相手の考えを尊重しながら、自分の考えを点検することが必要である。このようにして考えを深化させていくのだが、時に、その過程で自分の考え方が一転することもある。それが対話型講義の醍醐味である。

当日の白熱教室では、公共社会での宗教者の行動について、巧みなモラル・ジレンマが設定され、それについて「共に考え自由に意見を交わす」という方法で議論が進められていった。他者の意見を聞いていく中で、すべての人に共通する答えを導き出すことが非常に困難であるとあらためて考えさせられ、またジレンマの向こうにある「共同性と公共性の違い」といった問題の本質が、参加者による討議の中で見いだされていった。

## 六

### 本願寺白熱教室で出た意見

本願寺白熱教室では、小林氏の和やかな雰囲気や巧みな問いの設定により、まさに議論が「白熱」した。当日の「十一」あったモラル・ジレンマから、二つほどピックアップし、当日の活発な議論の様子を紹介したい。

#### 救援活動に行くべきか？

「あなたは、関西の住職です。大きな自然災害が、遠くのA地域で起こりました。あなたは、被災地の人々も「同朋」だと思い、現地に赴いて半年ほど救援活動をしたと思います。その決意を関係者に打ち明けたところ、へそれでは、その期間に法要などができなくなってしまう。お寺の仕事を優先してほしい」と反対が起りました。どうしますか」

小林氏が最初に救援活動を行うか行わないか、挙手を求めると、フロアの意見が真っ二つに分かれ、そこ

から議論がスタートした。

まず、ある僧侶が、「自分の個人としての信仰や身近な門徒さんをお事にしたい」と口火を切った。それに対し、他の僧侶から、「救援に行く前に周囲の理解を得るのではなく、行きながら理解を得るということもできる。行かなければ現地の状況は分からないし、行けば現地の様子を地元の人に知らせることができると」と反対の意見が示された。さらに、「文章の通りに遠くのA地域の人を『同朋』」と思っているのなら、

被災地の救援活動に専念したい。  
しかしそれではお寺に僧侶がいなくなってしまう。  
住職として、どうすべきか？

宗門内に限定  
されないへ自  
他共に〜とい  
う公共的な意  
識が、震災を  
通して、この  
僧侶に生まれ  
ているのでは  
ないか」とい  
う意見も出さ

れ、最初の二つの立場だけにとどまらない、熱気を帯びた議論へと展開していった。

### 政治との軋轢をどうするか？

「あなたの寺院は、A地域全体に影響力を持つようになりました。門徒の中にはいのちの尊とうとさという観点から脱原発を強く主張する人が多く、あなたもその意見に共感しています。一方で、政府は原発を再稼働する方針を示した場合に、あなたはこれに対して、僧侶として反対の声明を出しますか」というモラル・ジレンマには、会場が最も「白熱」した。声明に反対派の参加者からは、「門信徒にはいろんな人がいるので団体としては声明を出すべきではないし、混乱を避けるため個人としても慎重に判断する」との声や、「震災支援がそもそもその目的であったので、

政治的活動はしない」という声が挙がった。一方、賛成派からは、「意見を表明しないということで、容認する立場に立つてしまうことになる。個人としての立場は表明した上で議論すべき」、「原発問題の背後にある倫理的な問題は宗教者に専門性があるので、積極的に発言しなければならぬ」という意見が出て、喧けんげん々々々の議論となった。

対話型における問いかけは、仮に設定されたものである。それゆえ、ジレンマをめぐる議論の目的は、現実の具体的な課題へ直接的に答えを出すことにはない。価値観の異なる他者との熟議から、自己内対話が促進され、より普遍的な価値へと接近することが目指されている。

今回の会議は、小林氏が設定したジレンマから「共同性と公共性の違い」「宗教的公共性の特質」「宗教的ネットワークの可能性と実践性」「宗教の公開性」「宗教の持つ政治的公共性」「未来という公共性」といった本質に触れる課題があぶり出された。

まだ残暑の厳しい9月、参加された方々は、心に「熱」を持って、宗門のそれぞれの現場へ戻っていかれたように感じられた。（藤丸智雄教団総合研究室長）